

山と博物館

第56巻 第5号 2011年5月25日

市立大町山岳博物館



映画「岳」一ガク 撮影風景

「映画「岳」一ガク」
この映画を見たらきつと山に登りたくなる

松澤 まさみ

映画「岳一ガク」は、石塚真一原作の同名コミックを映画化。主人公・島崎三歩(小栗旬)が、北アルプスを舞台に山岳救助ボランティアとして活躍する姿を通じて、生きる力と山の素晴らしさを描いた感動作です。山を愛し、人を愛する天然キャラクターの三歩に惹きつけられた原作ファンも多いのではないのでしょうか。

昨年、松本市を中心にロケが行われ、大町市では北小学校と山岳博物館がロケ場所となりました。山岳博物館での撮影は2回行われ、そのうち1回は、空が白み始める早朝の長野県北部警察署のシーン。本番に向け暗闇の中、朝露に濡れた状況を再現するため駐車場に水を撒き、山岳博物館の看板を「長野県北部警察署分庁舎」に付け替えます。

辺りがうっすらと明るくなりよいよ本番を迎えると、北アルプスが見事なまでの美しさで姿を現し始めました。当初、山岳博物館の外観のみの撮影が予定されておりましたが、北アルプスの眺望を撮影する予定はありませんでした。ところが本番終了後、急に監督がカメラマンを引き連れて山岳博物館の2階に上がって行くのでどうしたのかと不思議に思っていると、ベランダから北アルプスを撮影し始めました。するとそこには、北アルプスが朝日に照らされ、紫色から段々とピンク色に変っていく姿が。感動的な夜明けでしたが、監督も撮影を振り返し、「他の場所でもちよつと考えましたが、山が入っても町が入らなかったり、町が入ると山が見えなかったりするんですよ。だから「大町っですごいな」って思っただけで、町と山の距離が、すごく絶妙な場所と距離感があって、山が見えても町が見えないってことがない。」と、大変感動的だったと語っています。

丁寧なドラマ作りで定評のある片山監督が表現する「生きる力」と「壮大なスケールで展開される北アルプスの美しさ・厳しさ」を、ぜひ劇場のスクリーンを通じて感じてください。

(前観光課庶務管理係)

なぜ事故は起るのか

永井 柳

白馬班

白馬班は、基本は拇池・大雪溪・白馬鍾温泉ルートをカバーしています。

私は北アルプスの北部で長野県から委嘱されて、北アルプス遭難防止対策協会夏山常駐隊員(以下、常駐隊)を1年間しており、常駐隊の組織と活動の簡単な説明と挿話、遭難事例を紹介したいと思います。

常駐隊は全国でも長野県の北アルプスでしか組織されていません。北アルプスも南部・北部に分かれており、南部は穂高方面、北部は白馬から槍ヶ岳まで大町警察署管内をカバーしております。

私の所属する北部は、北から白馬班3名、唐松班3名、キレット班2名、冷池班2名、烏帽子班2名、白馬拠点の隊長・副隊長、合計5班14名で構成されております。各班の活動は次のとおりです。



大雪溪の落石



主稜方面からの大崩落による土石流

よる岩石流・土石流が発生しており、3名の方が亡くなっております。歩行中は常に上部に気を配り、休憩する場所もより安全な位置を選択し、上部を注意しながら休みましょう。特に雪溪上での休憩は、落石の危険回避と体を冷やさない為にも短時間にしましょう。



落石沢の岩石流、右は杓子沢

メインはお花畑で有名な大雪溪ルートです。猿倉登山口から白馬岳までコースタイムは6時間の厳しい中級者以上の山なのです。が、初心・初級の登山者が多いのも特徴です。また落石事故の多いことでも有名です。7・8月になるとおびただしい数の石が雪渓上にありますが、これは全部落ちてきた石です。なかには車より大きな石が落ちて来る時もあります。近年、天狗菱下部の大崩落、秋道の地滑り性大崩落と登山ルートを横断する崩落に

近年、落石事故回避の為か、拇池ルートから白馬岳を目指す登山者が増えています。白馬鍾温泉方面は、大井出原下部鎖場の下りでの滑落死亡事故が多く発生しています。稜線の鍾温泉への分岐からの下りが長く、疲れたところで鎖場の通過となる為でしょうか。疲れてくると動きも判断力も鈍くなり、動作がいいかげんになりがちです。大井出原下部で休憩をとります。2名以上のパーティーでは、お互いの動作を確認しながら、声をかけあつて進みましょう。

鍾温泉の下部も、鍾沢での落石による死亡

事故が発生しています。その下、杓子沢手前の落石沢でも数年前に上部で大崩落がありその岩石流が登山道を横断し、杓子沢の雪渓上に数百メートル流れ込みました。休む場所の選択や危険箇所通過に時間がかからない様に注意してください。

また、白馬岳から天狗の頭附近までの間は、道迷いや行方不明の多発地帯です。稜線は植生が少なく、登山道と登山道外がわかりにくい所も多くあります。足元ばかりでなく五・六歩前やこれから歩いて行く方向を確認しましょう。

拇池ルートは白馬大池から上部は稜線歩きになるので、雷が心配です。雷は稜線で落ち易く、逃げる場所がありません。午後からは雷は落ちるものだと思つて計画して下さい。早発ち早着が基本です。

唐松班

唐松班は上・下山ルートの八方尾根と、縦走路の不帰ノ剣方面・大黒岳方面をカバーしています。八方尾根は標高1850mの八方池山荘の登山口から、稜線の標高2600mまで標高差750mと北アルプスでは稜線まで一番近いルートです。手ぶら・ウェストバッグのみなどの軽装で稜線まで登つてこられるお客さんをよく見かけます。ハイキング化しているという印象をうけます。最低、水・行動食・カッパ・ヘッドランプ・登山地図は装備してください。この北アルプスで一番稜線に近く短いルートにもかかわらず、骨折、捻挫、膝痛などで行動不能になり、救助要請されるケースが多いルートです。登山口までリフトで上つてこられることと、八方池まで道が良く整備されており、観光と登山との線引

きがされていないことが一番大きな問題だと考えます。最近では武田菱で人気の高い五龍岳への往路として八方尾根から入山するのが一般的になっています。

不帰方面は、不帰の二峰の北峰から一峰の鞍部への下りで滑落事故が多発しますが、近年その北峰の水平のバンド部分で2年続けて滑落による死亡事故が発生しています。登山地図上では点線の難路になっており個人差があるルートです。注意が必要です。

大黒岳方面では鎖場で滑落死亡事故がたびたび発生しています。



雪渓上で落石は音をたてずに落ちてきます。視界が悪い場合は特に危険です。

キレット班

キレット班は、上・下山ルートの遠見尾根と縦走路の五龍岳、キレット、鹿島槍北峰までをカバーしています。以前は滑落するといえはキレットといわれるように、「キレット班はキレット小屋に居ればよい」が常識でしたが、最近では遠見尾根や白岳―五龍岳間の多

方面での滑落が発生する状況で、五竜山荘とキレット小屋に隊員を1人ずつ配置する方針になっているようです。

冷池班

冷池班は、双耳峰の美しい鹿島槍ヶ岳南峰から爺ヶ岳―針ノ木岳―船窪岳―不動岳までと長い縦走路をカバーしていますが、メインは柏原新道から鹿島槍ヶ岳南峰までと針ノ木雪渓です。冷池班でも近年、今まで事故のなかった場所でも滑落事故が発生しています。

キレット班の事例もふくめ登山者の高齢化が原因となっているのでしょうか。

烏帽子班

烏帽子班は、冷池班の続きの不動岳から烏帽子岳―野口五郎岳―水晶岳―鷲羽岳―双六岳―槍ヶ岳までと最も長い縦走路をカバーしています。三俣蓮華の分岐から双六小屋までの巻道と槍ヶ岳の三分の一は大町市となっています。上・下山がブナ立で尾根であること、船窪小屋から烏帽子小屋間が北部では一番コースタイムが長いので、烏帽子小屋に常駐するのが基本になっています。昔は槍ヶ岳への縦走路・裏銀座として栄えましたが、深田久弥の百名山ブーム以後は、水晶岳・鷲羽岳登頂の為の選択肢としてブナ立で尾根から入山して縦走する方が多く見られます。

読売新道方面が、雲ノ平方面へは3泊4日以上の山行になるので山になれた方がほとんどです。

何故、滑落するのか？

高齢化ということがかたづけでは問題の解決にならないので、ここで滑落について考えたい

と思います。

滑落の原因には滑る、バランスを崩す、つまずきなどがありますが、「何故つまずくのか」に注目して私を感じていることをお話ししたいと思います。一つは爪先があがっていない原因には、疲れてあがらない、元々あがらないがあると思います。

日常で皆さんは、舗装されていたり板張りであったりと、平らな所で歩いているので、爪先をあげる必要がない為に、爪先があがらなくなつたのではないのでしょうか。毎日のように登山者を見ると、若者も中高年も爪先があがっていないことに気がつきます。でもこれは、普段からしっかりと踵から着地して歩くように心掛ければ改善されるのではないのでしょうか。平らな安定した所しか歩かないので、不整地でバランスを崩す・リカバリーできないので転倒したり滑って落ちたりするということも言えるのではないのでしょうか。現代人は平らな安定した所で生活しているので、足の指を使ってバランスをとることが少なくなっているそうです。皆さん、不整地を歩きましょう。

脱水

白馬岳では、昭和大学の医学部が白馬診療所を夏季の間開設されています。体調の悪い患者さんのほとんどに脱水症状が診られるそうです。脱水は持病の悪化や高山病を誘発するそうです。

バテて休んでいるお客さんに、「水分は摂っていますか？」と尋ねると、ほとんど「摂っている。」と返ってきます。「どの位摂っていますか？」と具体的に尋ねると、ペットボ

トル半分だったり必要量を摂取していないことがほとんどです。雪渓上や天気の良い日は、暑くないので水分補給が不足しがちです。のどが渇いたと感じた時は、脱水が始まっているので運動能力や判断力も下がっていきま



激しい雨の後の秋道の地滑り性崩落跡

バラバラ事件

唐松班での出来事です。午後遅い登山者を確認するのも基本的な仕事なのですが、唐松山荘から不帰ノ二峰の北峰までパトロールに出かけた時に、三峰付近で中年の男性と出会い、少しお話しをしましたが、「自分の子供と友人の子供（すべて高校生）を連れて来たが、遅れている」とのこと。「激励してやつ

て下さい。「みたいなきことを言われましたが、それは「あなたの仕事でしょう。」と思われました。お父さんは一人で唐松岳方面へ向かいました。そのうち警察から無線があり、「バテてしまい一峰の鞍部でビバークとのこと。テントも食料もあるので心配ないと連絡があった。」とのこと。とはいっても心配ですよね。

白馬大池での出来事です。夕方4時ごろ白馬大池山荘から白馬乗鞍の雪渓までパトロールに出かけたのですが、白馬大池の池畔で中年の男性とすれちがった際に「まだ後ろにお客が歩かれますか？」と声をかけると、「連れが一人来る」とのこと。白馬乗鞍の雪渓に到着すると濃い霧だったんですが、遠くの方で「オーイ」と声がするので「オーイこつちだよ」と何度も声をかけました。岩場から雪渓にとりつき山頂側に来ないといけないんですが、岩場をそのままずっと上っていった、さまざまだったんです。初めてのルートで視界が悪かったりすると、広い稜線や岩場、雪渓の横断などは判りにくいものですね。

白馬鍾温泉での出来事です。夕方お客さんが一人で小屋に到着したのですが、お話をうかがうと三人パーティーとのことでした。暗くなっても仲間が来ないので遭難騒ぎになり、一人は天狗山荘、一人は大井出原の雪渓を間違った方向において、身動きがとれなくなり救助されたということがありました。

パーティーはバラバラにならないで下さい。お話ししながら歩ける距離がいいと思うのですが、最低でもお互いが見える距離がいいと思います。前の人に追いつくように滑って150m斜面を転がり落ちたケースもブナ立て尾根でありました。その方は全身打

撲で一ヶ月入院されました。パーティーは相談しあったり、助け合ったり出来るところがいいんですが、バラバラになるとトラブルの元です。



ヘリを待つ遭難者と隊員。視界が悪いとヘリは飛びません。

低体温症

白馬大雪渓ルートでの話です。お婆ちゃんと親戚のおじさんと小学生の兄弟の4名のパーティーでした。午前中から雨が降っている日に、小雪渓でトラバースの雪切りを数名でしていると、カッパを着ていない半ズボンの子供(兄)が通過していききました。一緒に作業をしていた隊員と顔を見合わせました。が、元気に登っていったので遭り過しました。ところが、一時間半ほどして子供が行動不能になっていると連絡が入り、現場に急行すると他のパーティーの男性のポンチョの中でうずくまっており、お婆ちゃんはやつと歩いているという状態でした。お兄ちゃんは隊員が背負って、お婆ちゃんは両脇を隊員に抱えら

れ、次々とパーティー全員が山頂宿舎に収容され、お兄ちゃんとお婆ちゃんは診療所に引き渡されました。お兄ちゃんは35℃、お婆ちゃんは34℃まで体温が下がっていました。

この日は大町警察署から3名の山岳隊員が上って来てくれたので、救助活動が迅速に行なわれました。あと問題があったのは、子供たちに着替えをさせようとしたんですが、子供達のザックにあつた着替えが雨に濡れていたことです。

ゴアテックスのカッパは子供にはなかなか与えられるものではありませんが、カッパは必需品です。荷物も濡れないようにチェックしてあげてください。

この件を隊長に報告すると、隊長は朝から白馬尻で詰めていたのですが、半ズボンの子供を見つけて白馬尻で「カッパを購入していきなさい。」とリーダーのおじさんに声をかけていたそうですが、購入しないで登ってしまったらしいのです。

それとこんなことも。葱平で雨が降って来てカッパを着るのが遅れて、低体温症になったケース。

あとこれも雨の日のことですが、ビニールガッパのお爺さんが水分も行動食もとらずに低体温症になったケース。これはツアー登山でした。小雪渓の上の避難小屋に収容されましたが、意識がはっきりしていませんでした。一時間半ほど加温すると回復され、お弁当を食べて元気に登っていかれました。ほとんどの場合加温すると回復します。

加温は屋外では携帯カイロが有効だと思います。効率的に温めるには、内股の付け根、両脇、首に太い動脈が走っているんで、ここに携帯カイロをガーゼなどでくるんであてて

下さい。直接あてると火傷するおそれがあります。あと携帯カイロは濡らすと機能しなくなるので注意して下さい。

リーダーはパーティーのカッパを着るタイミングや、水・行動食を必要分摂っているかもチェックしなければいけません。

低体温症は加温しなければどんどん体温が下がって死に至ります。まさに死に直面した症状です。悪天候の下では近くに山小屋や避難小屋がなく、最低でもテントやツェルトがなければ加温することは難しいです。また、搬送も狭い登山道ではまず要救助者を背負わなければなりません。

何事故は起こるのか？ 知識や経験はもちろん必要ですが、今何が危ないか？ この先に潜んでいる危険は何か？ が想像できない人は事故を起こし易いでしょう。想像力をもって危険予知能力を高めてください。

山はすばらしい！ でもいつも危険と隣合わせだということ。とりわけリーダーの責任は重いということをお忘れなく。

(北アルプス遭難防止対策協会夏山常駐隊 北部長隊副隊長)

大町登山案内組(合理事)

山と博物館 第56巻 第5号

発行 2011年5月25日発行

〒388-0002 長野県大町市大町八〇五六一

市立大町山岳博物館

TEL 026-1220111

FAX 026-1221111

E-mail: smpaku@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpaku/

印刷 株式会社印刷

定価 年額一、五〇〇円(送料含む) (切手不可)

郵便振替口座番号〇五〇四一七二二九九三